

# 特別支援学校における資質・能力を育むカリキュラム・マネジメントに関する研究

## ―鹿大附特カリキュラム・マネジメントモデルの構築―

中 藺 良 彦 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

上 仮 屋 祐 介 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

肥 後 祥 治 [鹿児島大学教育学系 (障害児教育)]

雲 井 未 歆 [鹿児島大学教育学系 (障害児教育)]

廣 瀬 真 琴 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

小 久 保 博 幸 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

Research on curriculum management that fosters qualities and abilities in special needs schools:

Building a special curriculum management model for Special Needs School Attached to the Faculty of Education, Kagoshima University

NAKAZONO Yoshihiko, KAMIKARIYA Yusuke, HIGO Shoji, KUMOI Miyoshi, HIROSE Makoto and KOKUBO Hiroyuki

キーワード：知的障害特別支援学校、カリキュラム・マネジメント、資質・能力、三つのP D C  
A サイクル、授業研究

### 1. 研究の企画意図

鹿児島大学教育学部附属特別支援学校(以下、本校)ではこれまで、本校の教育実践上の課題や時代の要請に応じて様々な実践研究に取り組んできた。特に平成23・24年度の研究において、日々の授業における児童生徒の学びの姿に基づいた授業研究を組織的かつ継続的に行うことが、授業改善を促進させ、児童生徒が豊かに学ぶ授業の実現につながることを明らかにしてきた(本校研究紀要第19集, 2013)。

また、平成25年度以降の研究では、本校の学校教育目標等と、全体計画に示されている児童生徒に育てたい力や目指したい姿及び平成29年4月に公示された特別支援学校小学部・中学部学習指導要領(以下、新学習指導要領)に示されている育成を目指す資質・能力などを踏まえ、「本校の児童生徒に育てたい資質・能力(以下、本校で育てたい資質・能力)」として「基礎・基本」、「主体性」、「思考・判断・表現」、「人間関係」の四つに整理した。そして、「本校で育てたい資質・能力」と年間指導計画との関連を明確にした「授業計画シート」という単元(題材)指導計画を用いて、単元(題材)の指導計画を立案し、それに基づいた授業実践を行ったり、児童生徒が学んだ事柄について、「本校で育てたい資質・能力」の視点から分析的に評価する授業研究の在り方を構築したりする

ことで、日々の授業改善だけでなく単元（題材）指導計画を総括的に評価することができるようになってきた。この取組を組織的かつ継続的に行うことにより、年間指導計画を評価するための知見を蓄積することができるようになってきた。

本校が行ってきたこれらの取組は、新学習指導要領第1章第2節の4に示される各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現に係る「教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」や「教育課程の実施状況を評価し、改善を図ること」といった内容と重なる。そこで、上述した本校の取組を深化させることにより、カリキュラム・マネジメントに係る手続きの具体化が更に図られるであろうと考えた。

## 2. 研究の方向性と目的

### 2.1. 教育課程を教科等横断的な視点で組み立てていくこと

新学習指導要領では、特別支援学校（知的障害）の各教科等についても小学校等の学習指導要領等の改訂と同様に、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づいて目標や内容が整理された。本校では、学校教育目標等を基に「本校で育てたい資質・能力」を整理するとともに、それらの要素を踏まえた「授業計画シート」を用いて単元（題材）の指導計画を立案することで、「本校で育てたい資質・能力」を教育活動全体で教科等横断的に育む素地を築くことができた。また、平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（以下、答申）」や新学習指導要領第1章第4節1の(1)で「(前略)特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、(中略)過程を重視した学習の充実を図ること。」と示された。そこで、各教科等の「何を学ぶか」という視点と「どのように学ぶか」という視点をもって児童生徒が資質・能力を身に付けたり發揮したりする姿を具体的にイメージして単元（題材）の指導計画を立案する必要があると考えた。

このことから、様々な教科等の単元や題材で指導計画の作成及び実践を行い、児童生徒に育てたい資質・能力を育むための教育課程の編成及び実施に至る具体的な取組を明らかにすることにした。

### 2.2. 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと

新学習指導要領第1章第2節4で「(前略)個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の評価と改善につなげていくように工夫すること。」と示されるとともに、第1章第4節の3で学習評価の充実について示されており、児童生徒の学習状況の評価だけでなく、行った授業の指導目標や指導内容、指導方法の評価、改善を行い、より効果的な指導を追求することが重要であると述べられている。

このことについて、本校ではこれまで日常的に授業研究を実施し、児童生徒一人一人の学びの姿に基づいて、児童生徒の学習状況や単元（題材）及び授業における目標、学習活動、手立ての設定の在り方を評価・検討することが日々の授業改善に効果的であること、授業研究の記録等を蓄積することで児童生徒の学びの姿を根拠にした単元（題材）の総括的評価につながることを明らかにしてきた。また、単元（題材）の総括的評価を行う際に、時数や実施時期だけでなく、指導内容や有

効だった指導方法といった事項で評価するようにしたことで、実施した授業の評価を年間指導計画の評価につなげる道筋を明らかにしてきた。

一方で、年間指導計画の評価をどのように改善につなげていくか課題があった。そこで、これらの経緯から日々の学習評価と教育課程の評価・改善を連動させる具体的な手続きを明らかにすることにした。

### 2.3. 研究の目的

知的障害特別支援学校において児童生徒に育てたい資質・能力を育むための授業づくりの在り方及び日々の授業における児童生徒の姿を根拠にした教育課程の評価・改善の具体的な手続きを明らかにすることで、カリキュラム・マネジメントに係る一連の取組のモデルを示すことを目的とした。

## 3. 実践の概要

### 3.1. 児童生徒に育てたい資質・能力を育むための教育課程の編成及び実施に至る具体的な取組の明確化

- (1) 各学部の児童生徒の実態に応じて、学部の経営案等を基に「各学部で目指す姿」を整理
- (2) 各教科等の目標及び内容を授業づくりにつなげるために、単元(題材)指導計画の様式を検討
- (3) (1)で整理する「各学部で目指す姿」に基づき、各教科等の単元(題材)における目標や指導内容、学習活動などを設定する手続きをまとめ、単元(題材)指導計画を作成
- (4) 作成した単元(題材)指導計画に基づき授業実践

### 3.2. 日々の学習評価と教育課程の評価・改善を連動させる具体的な取組の明確化

- (1) 「本校で育てたい資質・能力」と新学習指導要領特別支援学校(知的障害)の各教科等の内容等に基づいた評価の在り方(評価規準及び評価基準など)を整理
- (2) 日常的に授業研究を実施し、児童生徒の学びの姿に基づき単元(題材)指導計画の評価・改善を随時実施
- (3) (1)の取組を基に、年間指導計画と個別の指導計画に示す内容の検討、及び様式を調整
- (4) 評価を終えた単元(題材)指導計画を活用した学部や教科等部における年間指導計画等の評価及び改善の手続きの検討

### 3.3. アンケート調査の概要

カリキュラム・マネジメントの取組については、実践を行った全職員へのアンケートを実施し、各取組の有効性を5件法で確認するとともに、自由記述による意見集約も行った。アンケートは、全職員が実践を終えた令和元年12月に実施し、24件の回答を得た。さらに、アンケート調査を基に有効性が確認できた取組からカリキュラム・マネジメントモデルを作成し、令和2年2月に実施した報告会における外部参加者のアンケート(回答数72件)を基にモデルの評価を行った。

## 4. 具体的な取組

### 4.1. 児童生徒に育てたい資質・能力を育むための教育課程の編成及び実施に至る具体的な取組

- (1) 様々な教科等でカリキュラム・マネジメントの取組を実践

これまでの学校研究において、年間指導計画や個別の指導計画、単元(題材)指導計画、日々

表1 実践した教科等

小学部	中学部	高等部
国語	国語	国語
算数	数学	数学
体育	音楽	音楽
生活単元学習	美術	美術
	生活単元学習	体育
	作業学習	生活単元学習

の授業記録, 教科等反省用紙など, カリキュラム・マネジメントの取組の中で様々なシートを作成し, 各シートに記載する内容を「本校で育てたい資質・能力」の視点を基に計画・実施・評価・改善することで円滑なカリキュラム・マネジメントを行うことができることが分かった。しかし, 各教科等を合わせた指導に限った実践だったことから, 教科別の指導における実践は十分とは言えなかった。そこで本研究では, 様々な教科等でこれらのシート等を用いたカリキュラム・マネジメントの実践を行った。実践を行った教科等を表1に示す。

(2) 各教科等の目標及び内容に照らした学習評価を行うための, 各教科等を合わせた指導及び教科別の指導の単元(題材)指導計画作成の在り方

様々な教科等の実践で作成する単元(題材)の指導計画の様式は, これまでの学校研究で有効性を確認できたものを用いることにした(図1)。各教科等との関連の欄については, 十分活用できていなかったという課題を踏まえ, 記述した教科等とどのように関連を図るかを具体的に記述するようにした。

授業計画シート (各教科等を合わせた指導) 記入例: 高等部			
学部	教科等名	学習集団(グループ名等)	単元・題材名
小・中	理科	高等部〇年生	やってみよう! 食生活のこと～郷土料理～
			総時数(実施時間) 12時間(9月)
			単元・題材の全体目標
			ア 鹿児島の郷土料理に関する歴史や使われている食材, 作り方などの特徴を友達と一緒に調べて, 発表することができる。 イ 友達と話し合って郷土料理の調理計画を立てるとともに, 調理方法に合った調理器具等を使って, 安全且つ効率的に調理することができる。
児童生徒名		個人目標	教科等
A		ア 友達と一緒に郷土料理に使われている食材や調理方法, 鹿児島の歴史や農産物に関する資料と比較して, 郷土料理の特徴をまとめることができる。 イ 調べたことに基づいてある食材等の分量から, 実際に必要分量を求め, 友達と話し合っって調理計画を立てたり, 調理計画を基にした分量や調理器具等の使い方を友達と確認しながら調理したりすることができる。	国・社・算・理・英・音・体・生・職 国・社・算・理・英・音・体・生・職
B		ア 友達と一緒に郷土料理に使われている食材の写真を図鑑やウェブページから探し見つけたり, 見つけた食材の写真や調理方法を使った写真を集めて郷土料理の特徴をまとめる。発表したりすることができる。 イ 数種や友達と一緒に調理計画を話し合っながら, 調理方法の決まりを守りながら調理計画を完成させたり, 調理器具等に付記した手順を手順どりにして, 安全且つ正確に調理をしたりすることができる。	
C		ア へできる。 イ へできる。	
D		ア へできる。 イ へできる。	
E		ア へできる。 イ へできる。	
F		ア へできる。 イ へできる。	
G		ア へできる。 イ へできる。	
H		ア へできる。 イ へできる。	
指導計画			
学習指導要領との対応(各教科等の内容)	できるようになってほしいこと(姿)	次 時数	学習活動
【言語】 (5) 教科書の地図・歴史資料や各種の資料などを用いて, 我が国のあるあるな地域の自然や生活の様子, 社会の変化や成長を知る。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) 【数学】 (1) 数と計算 生活に必要な数量の処理や計算をする。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) (2) 量と測定 長さ・重さ・量などの測定方法を理解し, 活用する。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) 【理科】 (3) 身の周りの現象 様々な物質の性質や機械・器具の種類, 構造及び働きについて理解し, 適宜に取り扱う。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) 【家庭】 (1) 家庭の機能や家庭の役割を理解し, 楽しい家庭作りのために積極的な役割を果たす。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) (2) 道具・機器等の種類や安全・衛生 家庭生活で使用する道具や器具を効率的に使用し, 安全や衛生に気を付けながら実習する。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2) (4) 家庭生活に関する事項 睡眠, 食生活, 住居などに関する実習を通して, 健康で安全な生活に必要な実践的な知識と技能を習得する。 <知・技(中)・中(中)の記述> (1・2)	ア 郷土料理に使われている食材に関する資料と, 鹿児島の農産物に関する資料を比較して, 同じ素材と異なる点を探したり, 付箋紙に書き出したこと。 (A, C, E) ア 図鑑やウェブページから郷土料理に使われている食材の写真を見つけること。 (B, D, F) ア ○○○○すること。 (G, H) イ ○○○○すること。 (A, C, E) イ ○○○○すること。 (B, D, F) イ ○○○○すること。 (G, H)	1 知っている鹿児島の郷土料理を発表したり, 図鑑やインターネットで調べたりする。 (1) 知っている鹿児島の郷土料理を発表する。 (2) 鹿児島の郷土料理を図鑑やインターネットで調べ, (1)で発表したものと比べて確認する。 (3) 図鑑やウェブページから郷土料理に使われている食材の写真を見つけること。 2 友達と一緒に郷土料理の歴史等について調べて, まとめる(発表する?) (1) 詳しく知らない(1)で調べたこと, 郷土料理を説明する。 (2) 郷土料理の特徴について鹿児島の歴史や農産物などの資料を基に調べて, まとめる。 3 作ったかたに郷土料理の詳しい作り方を調べて, 調理計画を立てる。 (1) へする。 (2) へする。 4 友達と協力して郷土料理を調理する。 (1) へする。 (2) へする。 5 学んだ郷土料理や調理の過程について振り返る。 (1) 調理した郷土料理を互に見せたり, 感想と比較したりして出来栄を評価し合う。 (2) 調理の様子を動画で撮影し, 調理器具等の使い方を評価し合う。	
<各教科等との関連> ○数学「数えよう!」「計算しよう!」「いろいろな計算をしよう」 ○数学「長さ・重さはわかる!」「長さ・重さはかかって仕よう!」「測定しよう」		○主単「なかまの家に泊まろう・社会見学に行こう」 ○主単「より良い生活/社会生活のこと」	<実施時間や時数に関する評価> 単元・指導した単元 ○実施時間 適当・要検討 ( ) ○必要と思われる時数 適当・要検討 ( ) (時間短縮必要)

図1 単元(題材)指導計画の様式(授業計画シート)

## 4.2. 日々の学習評価と教育課程の評価・改善を連動させる具体的な取組

### (1) 育成を目指す資質・能力の視点に基づいた評価の在り方（評価規準及び評価基準など）の検討

これまでの学校研究において、小・中・高の12年間を通して育てたい資質・能力を「本校で育てたい資質・能力」として整理し、各学部で育てたい資質・能力を「児童生徒が資質・能力を身に付け発揮している姿」として具体的な姿として明確にしたことで、学習過程における児童生徒の姿を育てたい資質・能力の視点で捉えることができるようになっていた。一方で、児童生徒が「どのように学ぶか」を明確にすることが難しく、その評価の手続きが課題となっていた。これは、整理した各学部段階の姿が6年間若しくは、3年間という長期的な姿として設定されており、各学部での指針となり得るものではあったが、授業の中でどのような姿を育てようとするのかを具体的に設定することが難しかったからであると考えた。

そこで、各学部段階で具体化を図った資質・能力を身に付け発揮している姿を、更に具体化し、授業において目指す児童生徒の姿として設定することにした。手続きは、これまでの取組を参考に、各学部の教育目標や努力点、教育課程編成の基本的な考え方などから、育てたい力や目指す姿をキーワードにして、新たに「学部で目指す姿」と「授業で目指す姿」として整理した(表2)。

表2 学部で目指す姿・授業で目指す姿

	基礎・基本	主体性	思考・判断・表現	人間関係
本校	一人一人が各教科等の内容を身に付けること	一人一人が学習の主体者として、進んで学習活動等に取り組むこと	一人一人が、今やこれまでの学習で身に付けた力を適切に選択したり、組み合わせたりしながら思考、判断して、課題を解決し、それを自分なりの方法で表現すること	共に学ぶ仲間と適切に関わりながら学習活動に参加することや、学習活動を通して一人一人が身に付けている力を発揮し合いながら課題を解決したり、互いの力を更に高め合ったりすること
高等部	各教科等の内容を身に付け、社会生活に必要な力を高める姿	将来の姿を見据え、自分の良さや課題を理解し、具体的な目標をもって生活しようとする姿	必要な情報を自ら活用したり、組み合わせたりして、社会生活の中で生かせる方法で自分の考えを伝える姿	社会生活の中で、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを取り入れたりしながら協働する姿
		今の自分に必要な事柄に興味・関心を広げたり、自分の課題に気付いて具体的な目標を設定したりして、身に付けたことを生かして学習に取り組む姿	自分も持っている知識や、情報機器等の道具を活用しながら得た新しい知識を生かして、自己選択・自己決定し、自分の考えや思いを伝えたり、表現したりする姿	集団の中で、自分らしさを発揮したり、周りの人に合わせたりしながら、役割を果たし、いろいろな人と協力し、学び合う姿
中学部	各教科等の内容を身に付け、集団生活に必要な力を高める姿	集団での自分の役割を理解し、身に付けた姿を生活や学習に生かそうとする姿	必要な情報を取捨選択し、集団の中で自分の考えを伝える姿	身近な集団の中で周囲の人と関わりながら協力したり、他者の考えに触れたりして互いの考えを認め合う姿
		自分のできることや、良さに気付き、自ら人や物、環境に働き掛けながら課題に取り組む姿	これまでの学習や生活経験を基に、自分なりに気付いて考えたり、判断したりしながら、表現を工夫して、集団の中で考えや思いを伝える姿	友達の意見を聞いたり、役割を担ったりしながら、学び合う楽しさを味わい、周囲の人と協力して活動に取り組む姿
小学部	各教科等の内容を身に付け、日常生活に必要な力を高める姿	できることを積み重ね、達成感を味わいながら、興味・関心の幅を広げ、身近な物や出来事に自分から関わろうとする姿	保有する諸感覚を活用しながら、自ら考え、判断し、教師や友達に必要な事柄や自分の思いを様々な方法を用いて伝える姿	集団生活の中で役割を発揮し、満足感や充実感を味わいながら、自分から人や物、環境に働き掛けながら、やりとりする姿
		興味・関心のある教材・教具を操作し、課題に取り組む姿	教材・教具の操作を通してできたことを実感し、できたことを教師や友達に表情や身振り、言葉などで伝える姿	設定された環境の中で共に活動する楽しさを味わい、教師や友達への興味・関心を高めながら、物や課題などを通してやりとりする姿

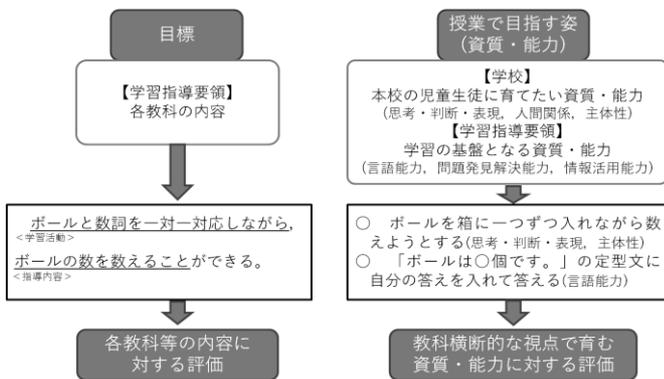


図2 授業の目標と授業で目指す姿の設定

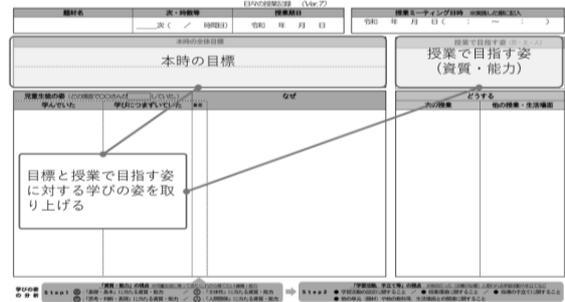


図3 授業で目指す姿(資質・能力)を追加した日々の授業記録

(2) 日常的な授業研究の実施を通じた、児童生徒の学びの姿に基づく単元(題材)指導計画の評価・改善の在り方の検討

授業を行う際には、各教科等の内容で示された資質・能力を基に設定される「目標」と併せて、本校で育てたい資質・能力や教科等横断的な視点で育成を目指す資質・能力から設定する「授業で目指す姿(資質・能力)」を設定することにした(図2)。「目標」と「授業で目指す姿(資質・能力)」を分けて設定することで、設定する際の視点が明確になると同時に、評価を具体的、多面的に行うことができると考えた。

授業で目指す姿(資質・能力)の設定については、日々の授業記録に記入する欄を追加し(図3)、次時の目標を設定する際に記入することにした。

様式の変更に伴い、これまで目標に対する学びの姿を記述していた「児童生徒の姿」の欄には、目標に対する学びの姿だけでなく、授業で目指す姿(資質・能力)に対する学びの姿も記述するようにした。授業で目指す姿(資質・能力)を設定することで、日々の授業から目標に対する児童生徒の学びの評価だけでなく、教科等横断的に育む資質・能力の育ち(変容)を捉えることができるようになると思った。

5. 結果及び考察

5.1. 児童生徒に育てたい資質・能力を育むための教育課程の編成及び実施に至る具体的な取組

(1) カリキュラム・マネジメントの取組の有効性

年間指導計画や単元(題材)指導計画の様式について、国語や算・数学、音楽、図・美、保健体育といった教科別の指導で実践を行い、様式の有効性を確認することができた(図4, 図5)。全職員へのアンケートからは、「細かな形式が示されたことで学習指導要領とも対応したものだということが分かり、実施、評価、改善へのつながりが分かりやすくなった。」「学習指導要領に示されている教育の内容が年間指導計画に明記され、資質・能力も意識しながら授業を計画することができた。」「どのような資質・能力を、どのような方法で身に付けるようにするのかの道筋が大変分かりやすくなった。」「単元(題材)指導計画を作成することで、題材を見通して生徒たちが何を学ぶのか、どのように学ぶのが明確になり、教育内容をしっかりと押さえたかを確認しながら授業ができた。」「単元(題材)指導計画を作成することは、実態

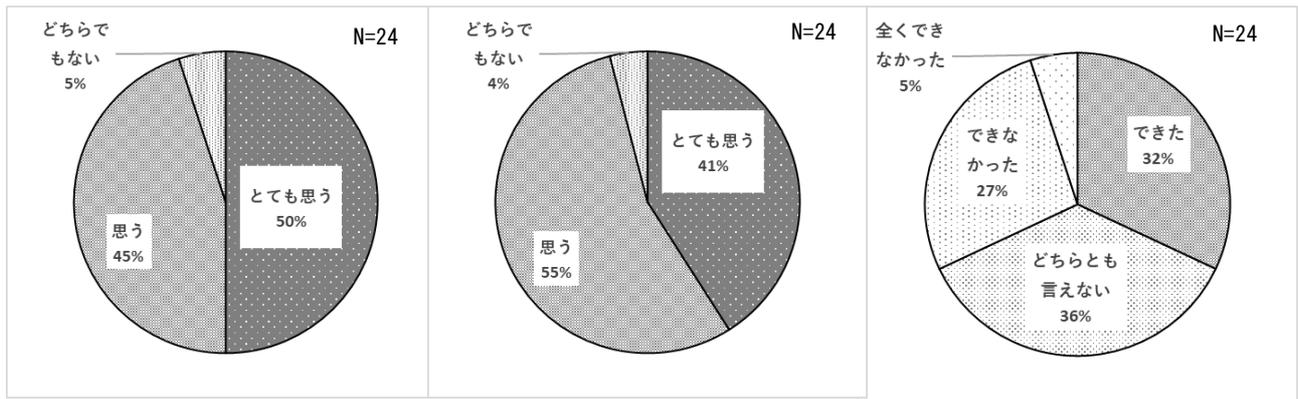


図4 年間指導計画は「何を学ぶか」を明確にするために有効だったか

図5 授業計画シートは「何を学ぶか」を明確にするために有効だったか

図6 各教科等との関連を書くことができたか

差が大きい学習集団においても、段階に応じた教育内容を確認しながら授業実践することによって有効であった。」など、それぞれの様式で「何を学ぶか」、「何ができるようになるか」、「どのように学ぶか」の三つの視点で整理した年間指導計画や単元(題材)指導計画の有効性を示唆する意見が挙げられた。

## (2) 各教科等を合わせた指導及び教科別の指導の単元(題材)指導計画作成の在り方

単元(題材)指導計画の作成段階で、各教科等との関連を計画的に記述することができたかという質問に対する結果を示す(図6)。結果は、「記述することができた」が32%、「記述することができなかった。」、「全くできなかった。」が32%となった。自由記述を見てみると、「国語の説明文の学習を生かして、生単における校外学習での説明文を読む場面に生かす活動に取り組んだり、校外学習の計画を立てる際に時計の見方や時間の計算を取り入れたりすることができた。」、「学部全体で共通理解した『学部で目指す姿』を少し意識するだけでも、実践の中身が変わったのではないかと思う。」、「自分が主に担当する教科等間の場合は、単元(題材)指導計画に記した内容に従って、各教科等の内容(基礎・基本)や主体性、思考・判断・表現、人間関係の育成を意図した学習内容や学習活動を設定することができた。」といった計画段階で記述することの良さを示唆する意見があった。一方で、計画段階での記述では、関連について考えることが難しいことや、計画段階で考慮する資質・能力が増えてきており、各教科等との関連まで考えるには難しさがあることを訴える意見も多かった。また、「どちらとも言えない」の割合が多かったことについては、記述した関連について、双方向からの検証ができなかったことが理由として考えられた。

## 5.2. 日々の学習評価と教育課程の評価・改善を連動させる具体的な取組

### (1) 育成を目指す資質・能力の視点に基づいた評価の在り方(評価規準及び評価基準など)

日々の授業実践における児童生徒の学びの姿を、教育課程の評価-改善につなげていくために、日々の授業記録に授業で目指す姿(資質・能力)を設定した。この取組について、「これまでと比べて児童生徒の資質・能力の育ち(変容)を多面的に捉えることができたか。」という質問を

行った。その結果を図7に示す。有効性を示唆する意見としては、「授業で目指す姿が設定されたことで、学部で目指す姿からはイメージしにくかった資質・能力を發揮している姿が具体的に設定しやすくなり、それに比例して、育ちも多面的に捉えられるようになったと思う。」「毎時間、資質・能力を設定することで、その設定した資質・能力について深く考えることができた。また、そのことについてサブ・ティーチャーと授業ミーティングをすることによって資質・能力の捉えを共通理解することができ、授業ミーティングで出た反省点を次時の授業に生かせていたと思う。」「目標だけではなく、具体的に資質・能力をどのように發揮するのかを授業で目指す姿として設定することで、学んでいた姿・学びにつまずいていた姿の分析を行う際に、より資質・能力に視点を置いた分析を行うことができた。」などが挙げられた。一方、課題を示唆する意見として、「資質・能力に意識が向けられるのは良いと思うが、それより大事な目標(各教科等の指導内容に対してのねらい)への意識を評価でもたなければいけないと思う場面もあった。」などが挙げられた。

実践の中で記入された日々の授業記録では、目標に対する姿が多く挙げられていたが、授業で目指す姿(資質・能力)についても、目標と同様に学びの姿として捉え、分析できつつあることも分かった。新学習指導要領では、教科等横断的な視点に立った資質・能力について、教育課程全体を見渡して育んでいくことが重要と述べられたことを考えると、目標と同じように授業における児童生徒の学びの姿から教科等横断的な視点に立った資質・能力を見取ることも重要になると考える。

## (2) 児童生徒の学びの姿に基づく単元(題材)指導計画の評価・改善の在り方

授業における学びの姿を資質・能力の視点で捉え、分析できるようになってきたことで、単元(題材)指導計画や年間指導計画の評価・改善にどのような変容が見られたかを検証するため、平成28年度1学期からの教科等反省(実施した単元(題材)の評価や有効だった学習活動等を集約して共通理解するもの)に記述されていた内容の分析を行った。教育課程に関する記述を内容別に集計し、各教科等との関連と有効だった学習活動に関する内容の変化を図8に

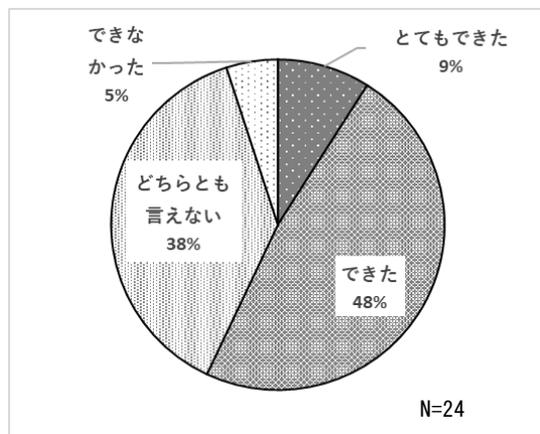


図7 資質・能力の育ちを多面的に捉えることができたか

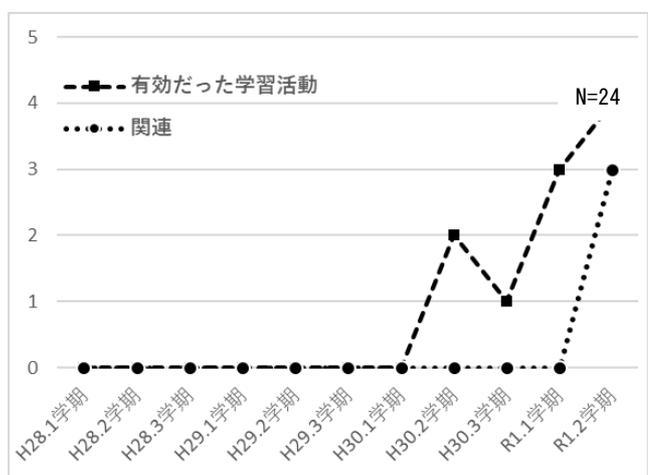


図8 教科等反省における教育課程に関する内容別推移

示す。有効だった学習活動については、学校全体で共有が図られた件数が平成30年度から増え始め、令和元年度に更に増えてきていることが分かる。各教科等との関連については、アンケートにおいて難しいとされていたが、令和元年度2学期の教科等反省で、複数の教科等部から全体に共有が図られた。日々の授業記録や単元(題材)指導計画に記載することの難しさを感じながらも、授業実践から意識的に各教科等との関連を話題にして検討を行うことで、これまで意図していなかった関連を見いだすことができた結果と考える。

### 5.3. 「鹿大附特カリキュラム・マネジメントモデル」の作成

これまでの結果を受けて、有効性が確認できた取組から、「鹿大附特カリキュラム・マネジメントモデル」(図9)を作成し、本校で行った研究報告会で参加者に説明、配付した。作成したモデルに関する参加者のアンケートでは、「大変参考になった」、「参考になった」との回答が100%という結果になった。自由記述においても、「カリキュラム・マネジメントモデルがとても参考になりました。手本にしなが、学校研究をすすめていきたいと思ひます。」などの感想があり、カリキュラム・マネジメントという難しく考えてしまう内容を分かりやすく示すものとして有効なものになったと考える。

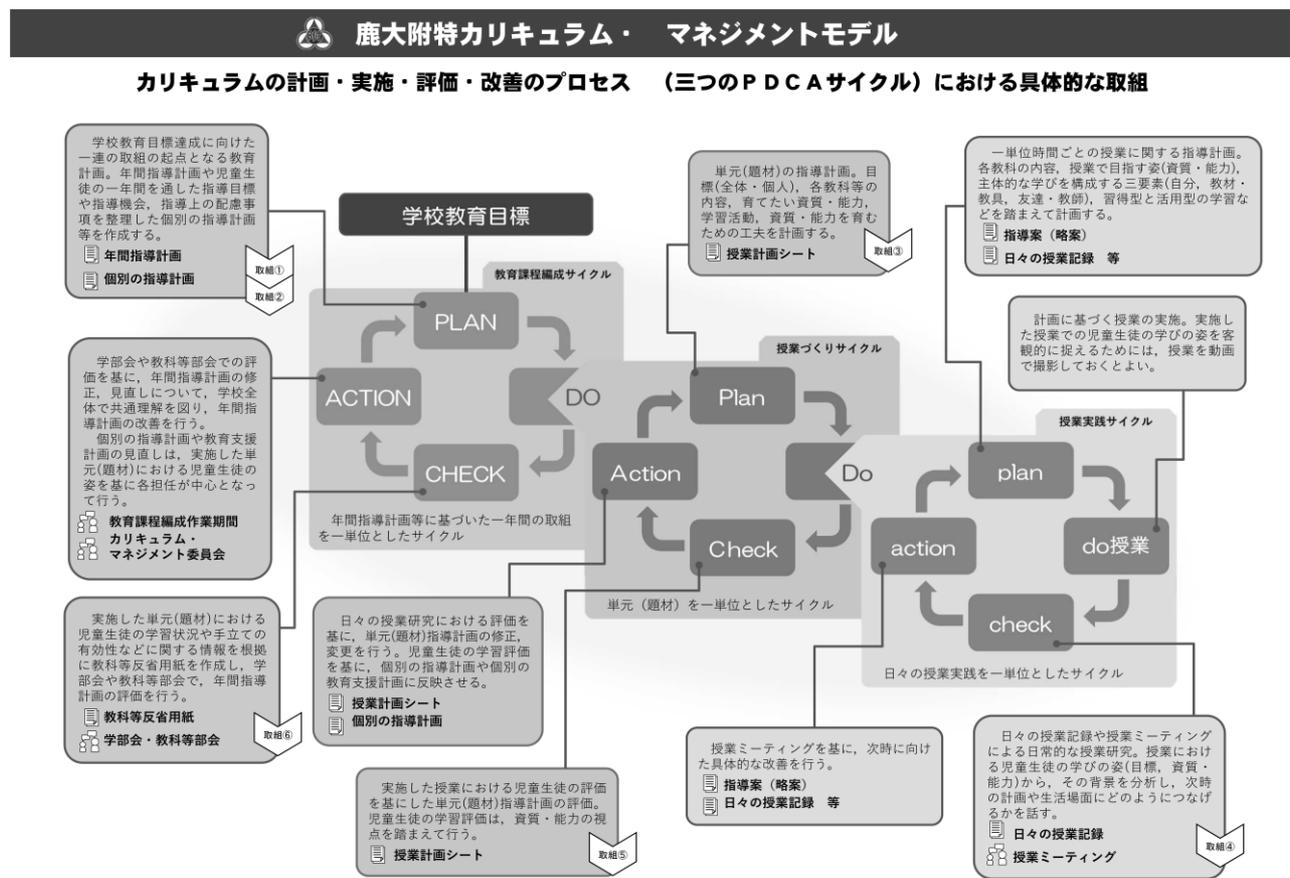


図9 鹿大附特カリキュラム・マネジメントモデル全体像

## 6. 成果と展望

本校でのカリキュラム・マネジメントを三つのPDCAサイクルで捉え、全体像を示すとともに、有効だった取組をカリキュラム・マネジメントの流れに沿って整理し、「鹿大附特カリキュラム・マネジメントモデル」として示すことができた。一方で、実践を重ねる中で、育成を目指す資質・能力や教科等横断的な視点で育てたい資質・能力を踏まえて計画することの難しさが挙げられている。

本研究で整理したカリキュラム・マネジメントモデルを継続的に運用しながら、各サイクルの計画段階で考慮する資質・能力を整理していく必要があると考える。

## 7. 参考文献

- 秋田喜代美 (2017) 学びとカリキュラム (岩波講座—教育—変革への展望5), 岩波書店
- 安彦忠彦 (2005) 教育課程編成論 学校は何を学ぶところか, 放送大学教育振興会
- 高木展郎 (2016) 「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは—アクティブな学びを通して, 東洋館出版社
- 武富 博文 (2019) 深い学びへのアプローチ, 全国特別支援学校知的障害教育校長会
- 田村学 (2017) カリキュラム・マネジメント入門, 東洋館出版社
- 丹野哲也・武富博文 (2018) 知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント, 東洋館出版社
- 肥後祥治・雲井未歎・廣瀬真琴・鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 (2020) 子どもの学びからはじめる特別支援教育のカリキュラム・マネジメント—児童生徒の資質・能力を育む授業づくり—, ジアース教育新社
- 松尾知明 (2016) 未来を拓く資質・能力と新しい教育課程—求められる学びのカリキュラム・マネジメント, 学事出版
- 文部科学省 (2018) 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部)
- 文部科学省 (2018) 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部)
- 文部科学省 (2018) 特別支援学校学習指導要領解説総則編 (幼稚部・小学部・中学部)
- 文部科学省 (2017) 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学省 (2014) 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 (論点整理)
- 文部科学省 (2010) 学校評価ガイドライン (平成22年 改訂)